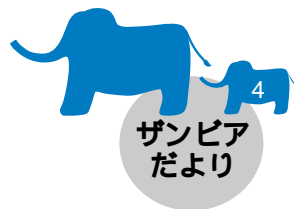


I am always thinking of you



結核予防会国際部・JICA専門家
(HIV/AIDS及び結核対策プログラムコーディネーター)
座間 智子

12月1日は、「World AIDS Day」でした。世界各国でこの日は、HIV/エイズに係るキャンペーンや啓発活動、また、HIV/エイズへの差別や偏見と戦うための積極的な取り組みが行われました。日本ではどのような取り組みがされたのでしょうか？

ザンビアでは、大統領の参加のもと、カトリック教会において、これまでHIV/エイズで亡くなった人々への追悼の意をこめて、また、国家としての強い取り組みの意志を確認すべき場として、キャンドルサービスが行われました。厳かな雰囲気の中で、人々は、これまで失った兄弟、子供たち、配偶者のことを思い浮かべながら、これからのザンビアへ希望や願いをこめ、キャンドルに火をともしました。

マシーエという14歳の少年がいます。彼は、私が生きている家の隣のメイドさんの子供でした。私の11歳になる息子と年が近いためか、二人はよくサッカーボールを蹴って遊んでいました。一度彼に、「マシーエってどんな意味？」と聞いたことがあります。「僕のお父さんは、僕が生まれる直前に亡くなったんだ。だからお母さんが、“トラブル”って言う意味でつけたんだ」と、言葉が返ってきました。3年前、彼のお母さんが亡くなりました。そして、彼はおばさんに引き取られていきました。今、彼は元気に地方の寄宿舎のある学校に通っています。学校の休暇のたびに成績表を片手に我が家に顔を見せに来てくれます。「将来何になりたい？」と聞くと、彼はまっすぐ私を見て「医者」と答えました。

もう一つのイベントとして、街中からサッカー場までのマーチが行われました。NGO、クリニックの看護師さん、感染者の人々が、それぞれの横断幕を掲げ、HIV/エイズにかかるメッセージが書かれたTシャツに身を包み、踊り、歌を歌いながら行進します。

到着したサッカー場は、何百人もの人であふれかえっていました。この時期のザンビアは、雨期の真っ只中です。しかし、この日は皆の願いが届

いたのか、青空が広がりました。ドラマや歌、保健大臣のスピーチが行われる中、少女三人の詩の朗読が心に残りました。「お兄ちゃん、叔父さん、お父さん。そしてSugar daddy¹。私たちが虐待しないでください。私たちの欲しいものは、HIVの感染ではなく教育です！」。ザンビアでは、少女たちへの虐待が横行しています。若年妊娠で教育を受ける権利を失い、HIV感染は少女たちと性交渉をすることで完治する²、という大人たちの身勝手な誤った考えのもとでの暴行が現実に行われています。

12月1日は、キャンドルに光をともしすることで、人々がそれぞれの心の痛みをいつも忘れないように、そして世界中の夢のかけらを拾い集めて希望へとつなげる、そして怒りや悲しみを次への行動や勇気に変える日なのかもしれません。

「Stop AIDS keep the promise」が今年のテーマです。エイズの拡大を阻止するために、身近な人々、そして異国の人々を思いながら個人、家族、コミュニティ、国家として、それぞれがどのようなPromiseができるのでしょうか？



ザンビアのスタッフとHIV・エイズプロジェクトの打合せをしている筆者

1 少女相手に金銭を伴った性交渉をする年配の男性を指す

2 「Sex with me doesn't cure AIDS!」と少女が怯えた姿で背を向けている、大きな看板がルサカ市内に立てられています。